

特産業

小野市の特産業は、そろばん、家庭刃物などを中心に古くからその基盤が培われています。特産であるそろばん、木工工芸品、家庭刃物（はさみ、鎌等）は、豊富な材料と農閑期を利用した労働力で次第に発達、優秀な製品を産出し、本市産業の中核となりました。こうした産業は歴史的・伝統的に継承されてきましたが、昔ながらの家内工業の色彩が強く、時代の趨勢とともに市場が縮小し、近年では極めて厳しい状況を迎えています。

そろばんは、江戸時代に製造が始まったと言われており、最盛期の昭和35年には年間360万丁を製造していました。昭和51年には、「播州そろばん」が国の伝統的工芸品に指定され、繊細な技術を生かして組み立てられたそろばんは、その使いやすさ、玉のはじきの良さに加え、磨き上げた美しさは工芸品としての価値さえ備えています。

木工工芸品は、昭和30年ごろにそろばん珠から考案・開発された「珠のれん」が製品化され、その後、昭和45年ごろからマガジンラック、珠鏡、花かご、額縁などの木工工芸品として生活に溶け込んでいます。

家庭刃物もそろばん・木工工芸品同様、小野市特産業の中心的な役割を担ってきました。文化年間に握鋏が始業されてから、農家の家内的工業として広がり、生産技術の改良、機械化、恵まれた労働力等により発達し、さらに、明治維新による経済・社会情勢の急変に伴い鋏類の技術開発、製品の考案が進み、ラシャ切鋏をはじめ、池坊鋏、剪定鋏、散髪鋏等が開発されて品種が増加し、業者も次第に増加して昭和10年代には刃物産地としての基盤を確立しました。

家庭刃物の中でも、200有余年の歴史を持つ鎌は、ナイフの製造技術を応用して鎌の製法の改良が始められ、明治維新後には複合材の開発により品質の向上が図られるなど「播州鎌」という名称で愛用されており、平成9年には兵庫県伝統的工芸品に指定されています。

小野市の特産業はこれまでまちの中心的な産業として、また都市イメージを形成するものとしての役割を果たしてきました。しかし、消費者ニーズの変化や外国製品の台頭等によりマーケットの縮小は避けられず、厳しい事業環境に加えて後継者難の問題が重なり、将来的な展望が描けない企業が少なくありません。今後、環境変化に対応した新たな展開、方向転換、また、企業同士の相互連携など外部の人材、知恵、技術が生きるネットワークづくりが求められています。